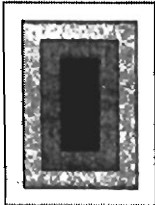


## 特集



現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う  
Part I 現代社会における結婚の意味とはなにか

### シンポジウム

## 「現代社会における結婚の意味とはなにか」

牧野 カツコ, 山根 真理

#### 要 約

届出に象徴される社会的制度としての結婚が日本では一般的なものとなっているが、しかし、晩婚化や婚姻外の性関係の広がり、子どもをもたないカップルの増加、中高年の離婚の増加などは、われわれに結婚とはなにかを問うている。われわれは、性別分業にささえられた近代家族型の結婚の揺らぎを体感しつつも、その次にくる脱近代家族のイメージを確立することができずにいる。シンポジウムでは、この領域で活躍されている4人の論者を迎え、近代社会における婚姻制度とそれを支える理論に対する立場を軸として、討論が展開された。①近代結婚理論と脱近代的家族論との対峙が本格的になされたこと、②同性間パートナーシップに関する議論が、家族社会学会の中かで初めて本格的になされたこと、③者パートナー関係に特権的な位置を与えない未来社会の可能性が示されたこと、の3点において、意義のある成果がみられた。

今後、脱近代社会における子どもの位置や親密関係について、議論が深まることが期待される。

キーワード：結婚、脱近代化家族、パートナーシップ

2003, 家族社会学研究, 14(2): 7-12

### Symposium "What is the meaning of marriage?"

Katsuko Makino, Mari Yamane

#### Abstract

Legal marriage is popular in Japan, however, increasing of late marriage, sexual behavior out of marriage, divorce rate in middle and old age put up a question to family sociologist, "what is marriage?" We know changing of legal marriage and disruption of families based on sexual division of labor in Japan but we don't exactly know forms of forthcoming postmodern families. In the symposium we had four speakers who were expert in this field and discussed why we marry, why we legislate own marriage and what actually marriage is.

The discussion was focused on modern family and post-modern family. The results of the symposium were, 1) the confrontation between modern marriage and post-modern marriage was found for the first time at the JSFS symposium. 2) There was an earnest discussion on homosexual partnership. 3) We found that there would be no special priorities on intimate partnership in the post-modern society.

We should expect further discussions concerning intimate relationships and the state of children in post-modern society at the next symposium.

**Key words** : marriage, post-modern family, partnership

2003, Japanese Journal of Family Sociology, 14(2): 7-12



## I. 結婚の意味を問う

日本家族社会学会研究活動委員会（野々山久也委員長）は、大会シンポジウムにおいて、今後3か年にわたり「現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う」をテーマとして取り上げることを決定した。2002年の第12回大会シンポジウムは、そのPart Iとして、まず、「現代社会における結婚の意味を問う」を取り上げた<sup>(1)</sup>。

結婚をめぐる社会的な状況は、日本においては、晩婚化、非婚化の広がりをはじめ、夫婦別姓問題、同棲や婚外子の問題などから、結婚という制度や形態への問い直しが行われてきている。世界に目を向ければ、フランスのユニオン・リーブル（自由な結びつき）やシングルペアレント、ゲイ、レズビアンカップルの広がりなど、まさに多様な結婚形態の広がりが見られる。

これまでの家族社会学においては、結婚は社会的に承認された性関係としてとらえられ、届出に象徴される社会的制度としての結婚を自明のものとして取り上げてきた。この背景には、戦後の民法改正により定められた夫婦家族制度が、その後の経済発展を支える性別役割分業を土台としたいわゆる近代家族のイデオロギーと形態を名実共に一般化し普及させてきた、社会的、経済的な環境がある。子どもは結婚した夫婦から生まれるものという考えは根強く、婚姻届や出生届あるいは戸籍などによって規定される近代家族モデルが、わが国の雇用、福祉、年金などの社会制度の土台であることは多くの研究者によって指摘されてきた。

しかし、わが国および世界の結婚と家族の現実をみるならば、結婚という法制度と現実との齟齬は、さまざまな現象に現れている。晩婚化や婚姻外の性関係の広がり、子どもをもたないカップルの増加、中高年の離婚の増加などは、愛情に支えられた性別分業型の「幸せ家族幻想」をすでに崩壊させている。生殖とセックスが、すでに分離している今日、さて改めて、なぜわれわれは結婚するのか、なぜ結婚を社会的に届け出するのか、そも

そも結婚とはなにか、という問いは、家族社会学にとって研究対象を規定する重要なテーマといえるであろう。

われわれは、近代家族型の結婚の揺らぎを体感しつつも、その次にくる脱近代家族のイメージを確立することができずにいる。シンポジウムでは、日本と世界の結婚の最先端の現状をみつめながら、改めて制度としての結婚の意味を問いたいと考えた。



## II. シンポジウムの報告者について

今回の「現代社会における結婚の意味とはなにか」を深めるにあたり、シンポジウムでは、次の4人の報告者に問題提起をしていただいた。

「シングル単位視点からみえる『結婚』と『恋愛』」をテーマに伊田広行氏（大阪経済大学）、「結婚をどうとらえるか」をテーマに望月嵩氏（大正大学）、「結婚制度の揺らぎ：スウェーデン社会から見た結婚・家族の意義」善積京子氏（追手門学院大学）、「同性間パートナーシップ試論」風間孝氏（NPO 法人 動くゲイとレズビアンの会／東京大学大学院）の4氏である。

伊田広行氏は、社会政策、労働経済、女性政策などを専門としておられる方で、『性差別と資本制：シングル単位社会の提唱』（1995）、『シングル単位の恋愛・家族論：ジェンダーフリーな関係へ』（1998a）、『シングル単位の社会論：ジェンダーフリーな社会へ』（1998b）などの多くの著作で知られる。とくに「シングル単位」という論点は、家族社会学へも多くの影響を与えてくれたので、今回ゲストスピーカーとしてお招きした。伊田氏は、配偶者控除や年金制度における専業主婦優遇の税制度などは男女で成り立つ世帯を単位とする制度であり、標準以外の家族に不利益をもたらすこと、個人を単位とした社会保障制度、税制、年金制度こそ、多様化する家族のあり方に対応できるものであり、弱者を大切に作る仕組みであることを論じてこられた方である。「自分の食い扶持は自分で稼ぎ、自分で家事をする発想」

は、自立する男女をめざすたいへん魅力的な主張であるが、乳幼児など自分の食いつ持を稼ぐこともできず1人では1日も生きられない人には、どのような理論を展開されるのか、家族社会学からは興味をもたれるところであった。

シンポジウムの冒頭からまず伊田氏に、今日の結婚制度のもつ矛盾と批判を展開していただくことによって、家族社会学者へ揺さぶりをかけていただくことをねらいとした。

望月嵩氏は、森岡清美氏との共著『新しい家族社会学』([1983] 1997)の著者であり、日本家族社会学会の成立期にその土台をつくってこられた方である。『家族関係と家族福祉』『現代家族の福祉』など家族福祉もご専門でおられるが、日本ではあまり研究者のいなかった配偶者の選択、青年期における異性交際などの領域の研究で、結婚についての研究をされてきた。

望月氏には、伊田氏の後を受けて、そもそも結婚とはなにか、ということをお立場から歴史的、制度的に結婚の意義を整理していただくと考えた。われわれはここで、男女の性関係を社会的に承認するという「近代」の結婚の慣行と制度の意味を改めて確認することになることが予想された。

同性のカップルであれ、婚姻届をしないカップルであれ、われわれは何らかの形で自分やパートナー、子どもの存在を社会的に届け出る仕組みをもっている。人間が初めからたった1人で人生を生きることができればよいが、社会的な保護や支援がなしには生きられない。そこで、届出という法的な制度がもってきた意味も確認しておきたいと考えた。

風間孝氏は、ゲイスタディーズを専門とされる気鋭の社会学者である。「動くゲイとレズビアンのかい」会員としても活動しておられる。日本の家族社会学では、結婚が異性愛と異性間の性関係の上に成り立つということをおもにも自明のこととしてきており、同性間カップルについての研究はもとより関心さえも多くはなかったといえるで

あろう。今回結婚とはなにかを考えるうえで、いまや欧米で大きな動きとなっている同性間カップルの法的承認の動きを視野に入れることは、欠かせない。近代家族幻想の崩壊の次にくる新しい多様な家族の形をイメージするうえで、今回、同性間カップルの問題を提起して下さるスピーカーを得たことは、たいへんありがたいことである。詳細は本書の風間氏自身の論文に譲るとして、新しい同性間カップルが、社会的、制度的承認を求めて、内外共に長い戦いをしてきたことは、制度としての結婚を再考するうえで、興味深い問題といわねばならない。公的な認知は、親子関係や扶養や相続に関する権利義務の社会的承認であり、社会の少数派に対する差別の解消の問題を提起している。

最後のスピーカーである善積京子氏は、『非婚を生きたい』(1992)、『婚外子の社会学』(1993)、『<近代家族>を超える』(1997)などの著作で著名な家族社会学者である。とくにスウェーデンの結婚・家族の法的、社会的な状況に詳しく、今回も夏にスウェーデンに行かれ最新の状況をふまえて婚姻制度の揺らぎについて提案をしていただくことになった。

スウェーデンでは、伊田氏の提案される個人単位の税制や社会保障を実現しており、風間氏の提案されるホモセクシャルパートナーシップも法的に承認されていると聞く。しかも婚姻外出産の子どもも、離婚後の子の養育にも社会が関与し、子の権利が守られているとも聞く。個人単位の社会において、では、人はなぜ結婚を選ぶのであろうか。それは日本のように結婚という制度にはまり込むのではなく、ひとつのライフスタイルとして結婚というスタイルを選んでいることになる。しかし、社会的に居所や子どもの出産に際して父親、母親の氏名を届け出ることなく、社会的な保護や福祉の施策を受けることができるのであろうか。届出という制度に慣れてしまっている日本との違いを通して、社会的制度としての結婚と、ライフスタイルとしての結婚についての考え方の違

いなどについて報告していただくことが期待された。



### Ⅲ. シンポジウムの構図

シンポジウム当日の報告と会場との議論をふり返ってみると、近代社会における婚姻制度とそれを支える理論に対する立場を軸として、論が展開されたように思う。シンポジウム報告者の議論では、望月氏と、伊田氏・風間氏・善積氏3者の対立構図が鮮明になった。その分岐点になるのは「近代結婚」に対する立場の相違である。

望月氏の議論は、近代結婚理論をまさに再確認するものであった。すなわち、結婚の意義は社会的に承認された性関係、継続的關係、権利義務関係、全人格的關係の4点にあり、同棲や同性カップルなどの「脱近代的」関係性が生起してきている、それは「例外」であって、結婚の中核的本質はゆるがない、との論が展開された。

それに対して他の3人の報告者の議論は、本質主義から脱し、現在の「結婚制度」が「近代」という歴史的時代と不可分であり、社会・経済的状况の変化にともなって変容可能なもの、という歴史相対的なとらえ方をする点で共通していた。なかでも、もっともラディカルに「変革」を志向した議論を行った伊田氏は、多様な再生産配置が並存する「シングル単位社会」における親密な関係の可能性について論じた。伊田氏と比べると風間氏、善積氏の議論は、「変革志向」という点からすると、やや禁欲的であったが、いずれも周到に準備された論理展開で、同性間パートナーシップ要求をめぐる攻防のなかで、あるいは近年のスウェーデン社会の変容過程のなかで、現実に「脱近代」への社会変容とそれを説明する論理が生起しつつあることを示すものであった。

会場との質疑のなかでは、近代的婚姻理論と脱近代的関係性との対峙をめぐる論点も出されたが、それをさらに超えて脱近代的関係の可能性をめぐる論点も多く出された。全体として、若い層の会員の発言を中心にして議論は「脱近代」の方

向性に振れていたように思う。

近代婚姻と脱近代的関係の対峙をめぐる論点としては、まず、脱近代的社会構想のなかにある近代性への疑問がある。具体的には、(1) 同性婚の権利を求めるのは異性愛社会への同化ではないか、(2) スウェーデン社会はライフスタイル中立性の原理に基づいて変容してきているが、「2者の情緒的・親密関係」を基本にしている点で「近代」の延長上にあるのではないか、(3) 脱近代社会や関係性に関する議論にはメタ道徳が潜んでいるのではないか、などの論点が提起された。

また、脱近代的社会構想のもつ危険性に対する疑問も提起された。(1) シングル単位社会は自立した強い個人をモデルにしているのではないか、(2) 脱近代社会における子どもの養育をめぐる制度をどう考えるのか、などの点である。

「近代」対「脱近代」の対立構図を超えて、脱近代的関係の可能性をめぐる論点も会場から提起された。(1) 脱近代社会において、親密な関係性は2者相互排他的なものにとどまるのか、3者以上の人々の親密な関係に対して一定の権利・義務を与えることもありえるのか、(2) シングルであっても、養子をとるなど子どもを養育する権利が認められるのか、(3) 伊田氏が「スピリチュアル・シングル」として述べる関係は、具体的にはどのようなものか、などの諸点である。これらの論点は、カップル(対)を、親密圏の基本的関係として設定しない社会の可能性を示唆するものであり、企画側の予想を大きく超えた議論の展開であった。

上記の論点はいずれも今後、本格的な議論の深まりを必要とするものである。当日の討論時間は限られたものであり、十分展開することはできなかったが、次年度以降の討論のために、重要な素材が、短い時間のなかで凝縮されて提起されたといえるだろう。その一部は、本巻に掲載されている各報告者の論考のなかで発展的に展開されている。



#### IV. シンポジウムの意義と課題

最後に、2002 年度シンポジウムの意義として、3つの点をあげ、今後の課題を述べておきたい。第1は、日本家族社会学会のシンポジウムにおいて初めて、戦後家族社会学が形づくってきた「近代結婚理論」と、シングル単位論、同性間パートナーシップ要求など、近年の脱近代的現象・理論との対峙が本格的になされたことである。会場からの質疑時間の冒頭に「今ごろなぜ」と、企画の意義を問う発言もあったが<sup>(2)</sup>、脱近代的家族論が1990年代以降めざましく展開したにもかかわらず、それは日本の戦後民主家族理念を形成し、家族社会学の「模範」でもあった近代結婚理論との対峙を経てはこなかったから、今回のシンポジウムにおいて改めてその対峙が行われた意義は、家族社会学説史において、極めて大きかったといってよいであろう。

第2に、同性間パートナーシップに関する議論が、家族社会学会のなかで初めて本格的になされたことである。日本においては、同性愛のテーマはこれまで主としてセクシャリティ論のなかで議論されてきており、家族社会学のなかではオルタナティブ・ライフスタイルの一形態として論じられることはあっても、同性間パートナーシップそのものを近代家族・近代結婚との関連において正面から議論することはなされてこなかった。それが、今年のシンポジウムのなかで、初めて本格的な議論がなされ、同性間パートナーシップのテーマが家族論にとって「周縁」のテーマでは決してなく、近代社会の異性愛ジェンダー秩序のみならず公／私の領域分離をゆるがすインパクトをもちうるという論点を確認されたのである。

第3に、「結婚」あるいは親密な2者パートナー関係の権利・義務に対して、法的な届出や社会的承認などの特権的な位置を与えない未来社会の可能性が示されたことである。この論点は報告者のなかでは伊田報告のなかに含まれてはいたが、シンポジウムのタイトルが「結婚の意義を問

う」であったこともあり、各報告の焦点は、総じてパートナー関係に当てられていた。それにもかかわらず会場の議論のなかで、シングルや3人以上の人々の親密関係と再生産の権利の問題が提起され、「対」を超えた関係と制度の可能性の論点が投げ込まれたことは、家族社会学会の「成熟」を示すものであったといえるだろう。

当日の議論のなかで出された論点は、1つひとつが今後の学会のなかで本格的な議論が待たれるものである。改めて整理すると、以下のような論点にまとめられようか。(1) 脱近代的パートナー関係と近代的結婚とを分かつメルクマールはなにか。(2) 脱近代的社会、あるいはシングル単位社会において、子どもは家族、社会との関連のなかで、どのような位置におかれるのか。(3) 脱近代的社会における親密関係は、どのような可能性をもつのか。(4) 脱近代的親密関係は日本において波及していくのか、またその日本の特質があるとすれば、それはどのような点か。

次年度以降のシンポジウムおよび学会研究活動のなかで、上記の論点が深化していくことを期待したい。

#### 【注】

- (1) 本稿の執筆者である牧野と山根は、シンポジウム当日の司会者をつとめた。当日のシンポジウムでは前半の司会を牧野、後半を山根が担当した。本稿はシンポジウムでの役割分担にあわせて、I, IIを牧野が、III, IVを山根がまず執筆し、その後、議論と調整を経て作成したものである。
- (2) 大学院生など若い人たちの発言が多くなされたのも今年のシンポジウムの特徴であった。若い層の発言は総じて「脱近代」の方向に振れる傾向があり、中堅・ベテラン層の発言が近代一脱近代の関連に焦点化される傾向にあったのと対照的であった。冒頭にシンポジウムの意義に疑義を提起する発言が若い人からあったのは、現在20代、30代の人々は、晩婚化、離婚増加の時代を実感として経験している、という世代的経験とも関連していると思われる。

【文 献】

- 伊田広行, 1995, 『性差別と資本制：シングル単位社会の提唱』啓文社.
- 伊田広行, 1998a, 『シングル単位の恋愛・家族論：ジェンダーフリーな関係へ』世界思想社.
- 伊田広行, 1998b, 『シングル単位の社会論：ジェンダーフリーな社会へ』世界思想社.
- 森岡清美, 望月嵩, [1983] 1997, 『新しい家族社会学』(4訂版), 培風館.
- 望月嵩, 山手茂, 布施晶子, 牧野カツコ, 1973, 『家族関係と家族福祉』高文堂出版.
- 望月嵩, 本村汎編, 1976, 『現代家族の福祉：家族問題への対応』培風館.
- 善積京子, 1992, 『非婚を生きたい』青木書店.
- 善積京子, 1993, 『婚外子の社会学』世界思想社.
- 善積京子, 1997, 『<近代家族>を超える』青木書店.